

保育者の資質を育む体験学習の体系化の試み(1) —授業をととした学生の変容に着目して—

砥上 あゆみ⁽¹⁾ 菅原 亜紀⁽²⁾ 豊辻 晴香⁽³⁾

A Study on Systematizing the Experience-based Learning to Improve the Qualities of Childminder (1) : —Focusing on the Students' Changing through the Classes— by

TOGAMI, Ayumi SUGAHARA, Aki TOYOTSUJI, Haruka

1. 問題意識

近年、子育て家庭を取り巻く環境の変化に伴い、子育ち・子育てにおいて様々な課題を抱える現状にある。このような社会状況を背景に、保育領域には、①ケア、②教育、③子育て支援の機能を果たすことが期待され¹⁾、乳幼児期の子どもの保育に携わる保育者に求められる職務内容は多岐にわたり、子どもの育ちや子育て支援において重要な役割を果たしている。このように、近年、保育者の機能や役割は多様化し、保育における課題も複雑化している中で、保育者一人一人の資質・専門性の向上が求められている。

保育者^{注1)}に求められる資質について、2008年に施行された「保育所保育指針」には、「保育所における保育士は、児童福祉法第18条の4の規定を踏まえ、保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識及び判断をもって、子どもの保育をするとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである」²⁾と示さ

受理日 令和2年1月22日

- (1) 純真短期大学こども学科 助教
- (2) 純真短期大学こども学科 助教
- (3) 純真短期大学こども学科 講師

れている。また、2017（平成 29 年）告示、2018 年（平成 30 年）に施行された「保育所保育指針」の改定において「保育所職員に求められる専門性」については、「子どもの最善の利益を考慮し、人権に配慮した保育を行うためには、職員一人一人の倫理観、人間性並びに保育所職員としての職務及び責任の理解と自覚が基盤となる」³⁾ こと、さらに、保育所の職員は、その言動が子どもあるいは保護者に大きな影響を与える存在であることから、特に高い倫理観が求められている。児童福祉施設の設備及び運営に関する基準には「児童福祉施設に入所している者の保護に従事する職員は、健全な心身を有し、豊かな人間性と倫理観を備え（児童福祉施設の職員の知識及び技能の向上等）児童福祉事業に熱意のある者であって、できる限り児童福祉事業の理論及び実際について訓練を受けた者でなければならない。」⁴⁾ と示されている。このように、保育に携わる保育者の基盤には、個々の豊かな人間性や高い倫理観が求められている。傳田⁵⁾ は、対人援助職には職種や領域が異なっても共通とする本質があり、優れた対人援助職の本質として、理論や技法だけでなく、援助者のもつ資質や人間性も大切であると指摘している。つまり、保育者を養成する本学^{注2)} においても、保育の知識および技術の修得とともに、保育者としての倫理観や人間性を育んでいくことが重要な課題となる。

2. 研究の目的

質の高い保育者を養成するためには、保育の知識及び技術とともに、人間性や倫理観といった保育に欠かすことのできない資質をどのように育んでいくのが課題となる。

保育者を養成する課程において、学んだ知識や技術を生かすのは、保育の実践においては、個々の倫理観や人間性に依拠している様子がみられる。そこには、学生の素質、これまでの経験、入学後の授業や実習体験で培われていくもの等、さまざまなことが関連している⁶⁾。しかし、保育者には、子どもの捉え方が一様にならない、多角的な視点が求められるものの、共通する援助観や価値観が必要であるため、価値観の統一ではなく、保育者としての基盤となる人間性や倫理観を育むことが重要である。また、本学の保育者を目指す学生の課題として、保育者に求められている資質の素地となるものを育むことの必要性も感じている。このような現状を鑑み、本学で保育者の資質を育むための授業を実践した結果、学生に保育者としての資質の向上につながる変容がみられた。そこで、保育者を養成する課程において、この授業実践を基に、保育者の資質を育むための学習プロセスの体系化を試みることを研究の課題とし、本稿では、体験学習をととした学生の変容を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

上述した、資質を育むための体験学習の実践における、現 2 年生（実施時期：1 年生）の授業をととした学生の変容は、授業終わりだけではなく、日常の学習、資格取得に係る実習においても影響を与え、学びを深めていく学生の姿がみられた。そこで、この体験学習でどのような保育者としての資質を育むことができるのか、学生の体験授業をととした変容に

着目して明らかにしていく。

そこで、以下のような手順が必要であると考え。まず、保育者の養成に求められているものと、養成していくなかで教員が感じている本学の学生の課題を明確にする。次に、そのような学生の実態に即して計画した授業の目的や内容を示していく。そして、その学習を体験した学生の感情や行動がどのように変容するのか、KJ法⁷⁾を用いて学生の感想の分析をおこなう。分析対象は、現1年生とする。最後に、学生の変容がどのような保育者の資質を育んでいるのかについて、考察をおこなう。

4. 先行研究の検討および分析結果

(1) 保育者養成に求められるものと本学の学生の課題

後藤⁸⁾は、保育士の資質として求められるものは、養護性、共感能力、コミュニケーション能力、問題解決能力、責任感、倫理観、表情の豊かさ、快活さ等をあげている。また、林他⁹⁾は、卒業生の就職先である保育現場へのアンケート調査を基に、養成校への要望や保育者として必要なこととして、ピアノの技術や指導計画の立案等の「保育者に必要な知識・技術」、豊かな人間性や感性、価値観の「保育者の資質」、「社会人として必要なこと」、「保育者の意識、姿勢」等をあげている。このように、保育者の資質としては、保育の知識及び技術に関すること、子どもや保護者、他の保育者とのコミュニケーションの能力、保育の姿勢に関することなどがあげられている。また、対人援助職が大切にしなければならないことを見出すことを目的として、乳児保育に携わる熟練保育士の保育観をインタビューした臼井他¹⁰⁾は、ひとを援助する上で、まず【相手への思い】があり、行動指針としての【関わり方】を心にとめ、【具体的な方法】を実践していくプロセスがあることを明らかにしている。さらに、【保育の質向上を支えるもの】のひとつとして、＜保育士の意志や人間性、人生経験といった内部因子＞があげられ、家族や恩師に大切にされた経験が大きいことも明らかにしている。本学の学生においても、学生自身がさまざまな体験をし、内部因子を育む必要性を感じている。

次に、本学の学生の課題を叙述する。保育士養成課程等の検討会¹¹⁾において、保育所における人材（保育士）養成の課題として、「考える力」を身につけることがあげられているように、本学の学生にも答えは導こうとする姿や正解にこだわる姿等がみられ自分の考えをもつことのむずかしさ、考えることの困難さがみられる。また、「言葉で話すスキル・伝える力・コミュニケーション力」が身につくような科目の必要性が課題としてあげられている。だが、学生の実態は、より根本的な自分の感情を言語化することや言葉で相手に自分の考えや思いを表現することの困難さ等が課題となっている。このように、保育者に求められる資質を育むためには、その素地となり得ることから育んでいくことも大切となる。以下、教員が感じている本学学生の課題をまとめたものが表1となる。

表 1：教員が感じている本学学生の課題

① 考えることの困難さ	・答えはひとつしかない、正解かどうかにかかわる等の限定的な思考がみられる。
② 意欲、積極性の乏しさ	・わからないことに対して理解に努めようとする姿がみられない ・最初に結果や答えを求め、時間をかけて、考えてみたり、やってみたりする姿がなかなかみられない。
③ 指導的な考え方	・子どもを注意すること、だめなことはだめと教えるなど、子どもの姿を学生が考える正しい方向に導くことが保育者の役割であると考えている。
④ コミュニケーション能力の乏しさ	・自分の感情や考えを言語化することの難しさ ・他者に自分の気持ちや思いを伝えることの難しさ
⑤ 安定しない自己肯定感	・自己受容が乏しく自信がもてない、もしくは、自信過剰で自己を省察することができない。

(2) 授業の目的及び内容

2年間を通して開講している「保育・教育基礎研究Ⅰ～Ⅳ」および「保育・教育基礎研究Ⅰ～Ⅳ」授業の一部において、保育者の資質の素地を育むことを目的として、1年生の前期から「演習授業」を実施している。授業の目的と体験授業の内容は、表1で示した学生の課題を複合的に考え、以下のような計画を立て実施している。また、この授業内での演習は、体験すること、個々での振り返り（日常生活における自身の感情や考え方の気づき）、他者との共有（自他ともに尊重する）等、学びを深めるために体験学習のサイクルを大切にしている。さらにこの授業での学びを、日常に汎化することで、学びを深めることを意図しておこなっている。

I. 日常の行動選択と、その時の自身の感情について

学生がイメージしやすいように日常生活に起こりうる場面のエピソードを提示し、自分だったらどのような行動を選択し、どのような感情を抱くかを個人で考えた後に、グループで意見交換し、クラス全体（87名）で共有する。物事の捉え方によって、次に選ぶ行動が決まり、その行動によって次に起こることが変わるという行動選択のサイクルを体験するとともに、多様な考え方があることを知ることを目的としている。さらに、他者と共有することで学生自身が感じたことや気づいたことを基に、1週間を意識的に過ごしてみて、翌週、その感想を持ち寄ることを提示して終了する。

II. 行動選択の変化による感情の変化について

行動選択のサイクルを日常に汎化するとともに、行動選択の変化により生じる感情の変

化に気づくことを目的としている。「今までの自分ならどうしていたか」「今回の自分はどうか」意識的な行動の変化への気づきや感じたことを個々で振り返り、他者と共有する。学生自身が行動選択における感情や行動の変化を実際に体験していることで、学びの広がりや深まりが期待される。

Ⅲ. 自己の感情や考えを見つめる

ポジティブな感情だけではなく、どのような感情や考えも自分で認めることを目的としている。自分の怒りなど、ネガティブにとらえている感情に目を向け、その感情の整理をおこなう。保育者は感情労働と評されることもあるように、自分自身の感情のコントロールが非常に重要となる。ネガティブな感情も抑制するのではなく、その感情を認めていくことで、自己を認めることにもつながっていき、自己肯定感を育むことにもなる。

Ⅳ. ジェスチャーゲーム

言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの重要性にふれるとともに、学生間における表現の解放を行うことを目的とする。開始直後は、ジェスチャーのみで相手になにかを伝えることの難しさを感じている様子がみられるが、目と目を合わせて対話をするものの大切さや相手に伝えよとする気持ち、そして、伝えようとしている相手を懸命に理解しようとする姿勢、そしてその姿勢が、伝えようとする側にとっても伝える意欲につながっていく。これは、共有することの楽しさや喜び、相互コミュニケーションの大切さを改めて実感できる機会となりえる。

Ⅴ. 印象による思い込みへの気づき

人が印象（見た目やこれまでの体験）にどれだけ左右されていることに気づくことを目的としている。演習方法は、同じ人物のいくつかの写真を1枚ずつ提示し、この人物がどのような人柄でどのような職業についているかなどを自由に発言していく。また、「質問絵本」¹²⁾を見て、それぞれ自分が考えた答えと何故そう思ったのかを周りの学生と共有する。

（3） 分析結果（学生の感想より）

今回の分析対象である1年生87名のⅠ、Ⅱの授業感想とⅠ～Ⅴの授業を終えた感想をカテゴリー化した結果を表2. 3. 4に示していく。分析の方法は、内容の類似性が高いものをグルーピングし、カテゴリーに分類する。このカテゴリーを小カテゴリーとする。これらの内容をさらに類似性の高いものにグルーピングし、グループ名を付けたものを大カテゴリーとする。また、小カテゴリー内の代表的な記述も含め、表に示す。表記の仕方については、文中の大カテゴリーを【】、小カテゴリーを『』、代表的な記述を「」にて表記するものとする。

学習プロセスの体系化を試みるために、大カテゴリーが授業内容、小カテゴリーが学生の変容となっている。そのため、学生の変容に着目をするため、小カテゴリーを主として分析結果を示し、大カテゴリーの授業内容に関しては、考察において記述していく。

表 2：日常の行動選択と、その時の自身の感情等

I の授業感想より、199 の記述を抽出し、カテゴリー化したものを表 2 に示す。

まず、注目したいのは『多様性の認知』である。ある出来事に対しての捉え方の違いについてこの授業の中で学生自身が初めて気づいているということが明らかとなった。「皆同じだと思ったが違った」、「人によって捉え方が違う」など、自分とは異なる感覚を他者がもっていることに気づき、他者を理解し認めるきっかけとなっている。また、『意見交換について』は、「おもしろい」「たくさんの意見を聞けてよかった」など、他者と意見交換をし、共有することへの意義を感じ取れる記述が多く見られた。さらに、他者の捉え方を知り、その後に導き出される行動によって、どのように変化していくのかを実感することで、『自分への振り返り』や『前向きな思い』『大事にしたいこと』へ繋がっていると考えられる。

『周囲に対して』『意識』『保育者として』、それぞれに非常に意欲の高い内容の記述がみられた。このことは、学生自身が実際の生活や保育者としての学びにおいても取り入れていこうという行動レベルでの変化にも繋がっていくのではないかと考えられる。

このような学生の内面的な変化が行動へ繋がるような意識の変容は、「今まで考えたこともなかったことを考えることができた」「思いもしない意見を聞き、勉強になった」など学生の新たな発見がこの学習で得られた成果であると考ええる。

表2: 日常の行動選択と、その時の自身の感情等		
大カテゴリー	小カテゴリー	代表的な記述
意見交換	多様性の認知	・様々な感じ方がある
		・皆同じだと思ったが違う
		・人によって捉え方が違う
	意見交換について	・たくさんの意見を聞けてよかった
		・おもしろい
		・人の意見を聞くことで選択肢が増える
	捉え方と行動の関連	・どう思うかで、その後の行動が変わる
		・自分の取る行動で相手も変わる
授業での学び	自分への振り返り	・自分なりの一番良い選択が、相手にとっては違う意味かもしれない
		・自分の思考の傾向に気づいた
		・考えて行動する必要性
	前向きな思い	・自分も相手もいい気持ちになれる
		・人生が楽しくなる
	大事にしたいこと	・意見を伝え合うこと
		・違う考えもお互い認めていくこと
		・どちらの立場にもなって考える
今後について	周囲に対して	・相手のことも考えて行動したい
		・感謝の気持ちや気遣いをしたい
	意識	・今後意識して過ごしたい
		・プラス思考でありたい
		・優しい考えをしたい
	保育者として	・子どもの気持ちを読み取れるようになりたい
		・子どもそれぞれに対応できるようになりたい
		・自分たちと同じく子どもも違うはず
授業について		・今まで考えたこともなかったことを考えることができた
		・思いもしない意見を聞き、勉強になった

表 3：先週の気づきを基に 1 週間過ごした変化を共有し、深める

Ⅱ. 行動選択の変化による感情の変化についての演習授業時の感想（自由記述）より、156 の記述を抽出し、カテゴリー化したものを表 3 に示す。

表3： 先週の気づきを基に1週間過ごした変化を共有し、深める		
大カテゴリー	小カテゴリー	代表的な記述
一週間の取り組み	気持ち	・人に優しい行動ができたし、自分もいい気持ちになれた
		・声をかけてよかった
		・少し勇気を出したら、喜んでくれて、自分もうれしくなった
	行動と感情	・いつもの自分なら選ばないポジティブな行動をとることができた
		・どう行動するかで気持ちが変わる
		・自身の行動で、人との関係や今後の自分が変わると思う
	自己分析	・自分の強み弱みが見えてきて、今まで自分にはなかった新しい考え方を意識できる
		・視野が広がり、感情の起伏が穏やかになる
		・ムカついても、冷静になって周りを見ることで、周りの気持ちを理解できた
	難しさ	・少し難しいこともあった
・自分の中で整理するのは難しい		
・何もなかった		
意見交換	共有	・みんなの意見を聞いて、とても良い気持ちになった
		・グループの人の前で話すとスッキリした
		・共感できる
	気づき	・これまでの出来事を振り返ることで、自分の考え方の変化を感じることができた
		・世の中には思うより温かくて優しい人が多いと思った
		・人の気持ちを考えて行動して悪いことはないと思った
意見交換について	・おもしろい	
	・楽しい	
今後について	周囲	・これからも声かけをしていきたい
		・誰かを幸せにできる行動と選択を積極的にしていきたい
	自分自身	・意識をもって行動したい
		・どうしたらいいかよく考えて行動したい
		・周りの人からの視点で考えてみよう

この 1 週間で「いつもの自分なら選ばない行動をとる」や「少し勇気を出したら」など、前週の授業の学びを得て自ら行動する学生の姿があった。結果「いい気持ち」「よかった」「うれしくなった」など満足感や快さを得ており、この成功体験コメントより「これから

〇〇していきたい」という今後への意欲の高まりが確認できる。

また、意見交換の場でも同様に、「グループの人の前で話す」能動的行動によって「スッキリした」という自己体験を他者と共有する楽しさを味わう感想もみられた。「スッキリ」する背景には、発言者の感情の整理と発露、そしてその思いを受け止めた仲間がいたと考えられる。これは、演習前に、自他ともに尊重する姿勢を示したこともあるが、学生自身が他者との共有体験のなかでの気づきから自主的に他者を受け入れようとする姿勢が育まれ、安心した環境の中で学生同士の関係性が構築され始めていると推察できる。さらには、「世の中には思うより温かくて優しい人が多いと思った」や「誰かを幸せにできる行動と選択を積極的にしていきたい」といった、自分や相手だけでなく、もっと広い枠組みで対人関係を意識していることも分かった。

このように、自己意識の変化や自己成長を感じた学生がいる一方、日々の生活で何かを意識・行動し自身を振り返ることの『難しさ』を感じる学生もいた。

表 4：前期終了時の感想

I～Vの授業最終日の感想より、95 の記述を抽出し、カテゴリー化した結果を表 4 に示す。

表4: 前期終了時の感想		
大カテゴリー	小カテゴリー	代表的な記述
気づき	学び	・人と接する大切さ、見えない部分、想像と違う部分を知る
		・様々な視点から考える大切さ
		・知ろうとする気もちコミュニケーションの心がけとても重要
	自分自身	・自分を知ることができた
		・自分の気持ちを客観的に見ることができた
	多様性	・一人一人意見や感じる違う ・自分とは違う考えや意見をもっているということがわかった
授業について	自分自身の変化	・気もちを考えて行動することが多くなった
		・いろいろな人と話すのが苦手ではなくなった
		・意見を言うことに対して苦手意識がなくなった
	授業について	・楽しい
		・おもしろい
		・考えさせられる授業
		・社会に出る上で大切な基礎を学ばせてもらった
		・保育者の土台となる授業
	保育者として	・保育者にとってコミュニケーションは大切
		・保育者の知識を生かすも殺すも人間力、人柄があってこそ
		・子どもや親の気持ちを理解し、心に寄り添う
今後について		・自分の気持ちをコントロールできるようにがんばりたい
		・周囲の考え方も参考に自分の価値観や考え方を広げていきたい
		・心に余裕をもてるようになりたい
		・相手の思いを理解したい
		・職だけでなく人生を明るく彩っていきたい

大きな特色は、「〇〇できた」や「〇〇がわかった」など、自分の経験に基づいた【気づき】の多さである。その証拠に『自分自身の変化』を実感している感想も多く、これは机上の論理にとどまらない体験学習で展開された授業の成果と考える。

そして「自分の気持ちをコントロールできるようにがんばりたい」とあるように、『自分自身』を知ることは、自尊感情を高めるだけでなく、対人関係のためにも自己理解する大切さを感じた記述も散見された。また「周囲の考え方も参考に自分の価値観や考え方を広げていきたい」とあるように、自他尊重の視点をもつことは、自己成長にも繋がると学生が認識したことを示している。

このような変化が起こった要因として、演習において考える視点を保育者ではなく現在の自分（学生）に据えたことが挙げられる。この形式の演習では学生は当事者意識で主体性をもって考え、想像し、行動することが可能であった。その学びから、『保育者として』のように、自分自身と保育者を結び付けて考えることができています。

中には「職だけでなく人生を明るく彩っていきたい」と、人生への展望を抱くことができた。このように、授業組み立ての出発点を工夫することで、「保育者の土台」となり「社会に出る上で大切な基礎を学ぶ」ことができたと考える。また、「保育者の知識を生かすも～人間力、人柄があつてこそ」という感想を学生が抱いているのは、学生自身が対人援助職において、保育の知識および技術を生かすためには、保育者としての人間性が大切だということに気づいた非常に重要な視点である。

5. 考察および本研究の成果と課題

本研究は、保育者養成課程における学生の課題を鑑み、対人援助職としての本質である人間性を育むために実践してきた授業における学生の変容に着目してきた。

近年の学生の課題からアクティブラーニングや演習授業の充実等が謳われているように、本学でも、保育の知識および技術の修得を目的として、そのような手法を授業に取り入れている。このような現状を踏まえ、当該授業においては、より、保育者の資質を育むことに重きをおいた体験学習を1年生の前期から実践している。

そこで、保育者の資質を育む体験授業の必要性を感じ、体験学習プロセスの体系化を試みるために、まず、本稿では、(1) 学生の課題を基に学生の変容をまとめ、それが保育者としてどのような資質を育んでいけるのかを考察していく。さらに、(2) 大カテゴリーを基に、本研究の成果と課題としてまとめていく。

(1) 授業をとおした学生の変容

授業内容は複合的に計画しているため、授業実践をとおした学生の変容を、以下、表1で示した本学学生の課題に沿ってまとめていく。

まず、①考えることの難しさである。答えを導き出すのではなく、自分の考えをもつということからはじまり、自分と他者の意見の違いや同じ意見でも理由が違うことに気づけた『多様性の認知』、他者との違いを肯定的に捉えていける第一歩となった。

これまで、答えはひとつ、正解が必ずあるといった学生の限定的な思考にも、徐々に、一つの事柄にもいくつの意見や考えがあつていいといった思考の広がりもみられるようになった。

また、授業を受けることで日常生活を改めて考えると、これまでは気づいていなかった、もしくは、目にもとめなかったことに気づくことができるようになった姿がみられた。さらに、いつもなら気づいても行動に移さなかった学生たちが、今回は違う行動を選択したことで、自己の感情変化や他者との関係性の変化、他者への感情の変化などにも派生していくことを体験できたことも成果である。保育者にとって、日々の気づき、気づいたことを行動できることは、大切な資質の一つである。

②学生の意欲の乏しさである。これは、授業内での意見交換において、相手が聞いてく

れる、受け入れてくれることが前提にあると、自分の意見を積極的に発信する姿がみられるようになった。自分の意見を他者に受け入れられる体験をしていくなかで自信につながっている様子や考えを共有することの意義やおもしろさを実感している様子もみられた。

③指導的な考え方をもっている学生の変化である。これまでは、注意しなければならない、だめなことはだめだと教えてあげなければならないと考えていた学生が、自分が否定的に感じる子どもの姿をうけとめようとする姿勢がみられたことである。自分とは違う他者の考えにふれ、その人なりの理由があることに気づいたことで、自分が否定的に捉えてしまう言動においても、その子どもの“なぜ”、“どうして”を考えることは、子どもに寄り添う保育を創造していくことにつながっている。これは、保育の中で、どのように子どもを理解するかによって、保育者の対応や保育内容も変わるだけでなく、子どもにとっての体験も変わるため、保育者の資質の上で、非常に重要なことである。

④コミュニケーション能力の乏しさにおいて、学生は自分の考えをどう表現したらいいかわからないということがあった。しかし、正解にこだわらず自分の考えを発信する機会やコミュニケーションをとおして相手に伝える体験の積み重ねによって、徐々に、自分の感情や考えを言語化することができるようになった。

さらに、人と関わるのが煩わしく感じることもあるような学生が、人と関わることの楽しさや人と意見を共有する意義を感じ取っている姿がみられた。

⑤ 安定しない自己肯定感については、今回の授業の感想からは、学生の変容がみられなかった。しかし、保育者として子どものありのまま姿をうけとめられることができるようになるには、学生自身がまず、自己を受容し、尊重できることが必要である。

(2) 本研究の成果と課題

対人援助職の本質となる保育者としての人間性や価値観を育むことを目的とした授業を実践してきた成果としては、学生自身が自己の変容を実感できていることである。また、他者との違いに気づけた学生は、他者と意見を共有することの大切さ、そして自他ともに尊重することの大切さを実感できている。

さらに、授業をとおして学生が感じたこと、気づいたことが、日常生活や学びに汎化され保育の専門性における学びが深まっていく。また、全学生が共通の授業を受講しているため、共通の言語や認識がとりこまれていく。それが基盤となり、安心、信頼できる環境のもと、学習を継続していく中で、さらなる、成果が見られることが期待される。

本研究においては、学生の自由記述だったからこそ、表出し、分析結果として明らかにできた学生の変容があるが、今後は、2年時、卒業を控えた学生の変容をみて、保育者としての資質を育む体験学習のプロセスを体系化することが今後の研究課題となる。

注

注 1) 根拠として示しているのは保育所保育指針であるが、保育士、幼稚園教諭、施設の保育士等、乳幼児の保育、教育に携わるすべての者を対象として考えている。

注 2) 本学は、保育士、幼稚園教諭を養成する短期大学である。

【引用・参考文献】

- 1) 北野幸子 (2009) ケア・教育・子育て支援を担う保育士養成の実態と課題. 社会福祉学. 5 (1) . 123-124
- 2) 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針. 第 1 章
- 3) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針. 第 5 章
- 4) 厚生労働省 (1948) 児童福祉施設の設備及び運営に関する基準. 厚生労働省
- 5) 村瀬嘉代子、傳田健三編 (2011) 対人援助者の条件-クライアントを支えていくということ. 金剛出版
- 6) 後藤範子 (2011) 4 年制大学における保育士養成教育と資質向上に関する一考察. 東京家政学院大学紀要. 51
- 7) 川喜多二郎 (1967) 発想法-創造性開発のために. 中央公論社
- 8) 再掲 6)
- 9) 林悠子、森本美佐、東村知子 (2012) 保育者養成校に求められる学生の資質について-保育現場へのアンケート調査より. 奈良文化女子短期大学紀要. 43. 127-134
- 10) 臼井はる奈・林悠子 (2015) 対人援助者に求められる援助観-乳児保育における熟練保育士の語りの分析を通して-. 佛教大学社会福祉学部論集. 11. 11-30
- 11) 第 2 回保育士養成課程等検討会資料 4 (2009) 保育所における人材 (保育士) 養成の課題
- 12) 五味太郎 (2010) 質問絵本. ブロンズ新社